

平成 29 年 6 月 13 日現在

機関番号：32630

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370729

研究課題名(和文)ポライトネス指導のための総合的研究—指導内容と指導方法の確立に向けて

研究課題名(英文) Towards better teaching of politeness with particular reference to content and methodologies

研究代表者

川村 晶彦 (Kawamura, Akihiko)

成城大学・社会イノベーション学部・教授

研究者番号：60407616

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：良好な対人関係を構築し、円滑なコミュニケーションを行う上で重要なポライトネスであるが、英語教育の現場で効果的に指導されているとはいえない状況であった。そのため、教材等の分析に続き、アンケート調査によって教育に応用可能な具体的記述を試みた。本調査の示唆する内容としては、以下の2点が挙げられる：(1)ポライトネスは言語を用いて行われる他の行為との関連から記述することにより、全体像もつかみやすくなる；(2)ポライトネスは語彙に重点を置いたアプローチによってかなりの範囲がカバーできる。

研究成果の概要(英文)： Politeness is believed to be crucial in building a harmonious relationship with others and in achieving successful communication; however, it is not effectively taught in the EFL context. We thus began our research by analyzing teaching materials in terms of politeness, and then sought to describe the mechanisms in which politeness is realized, on the basis of our questionnaire survey. The results of our project suggest: (1) politeness always comes with other language functions or acts, and so it can be appropriately described in conjunction with other acts languages can perform; (2) it is promising to approach politeness in terms of lexis.

研究分野：応用言語学

キーワード：ポライトネス 発話行為 語彙 英語教育

### 1. 研究開始当初の背景

本研究を開始した時点で、すでに「実践的コミュニケーション能力」の育成が中学校及び高等学校の学習指導要領で教育目標の1つとされて久しかったが、語用論的失敗に関する研究を教育に取り入れようとする試みはまだあまりない状況であった。しかしながら、特にポライトネスに関わる場合など、語用論的失敗は人格の否定にすらつながりかねないという危険性さえ指摘されており、コミュニケーション能力の育成には欠かすことのできない要素のはずである。そこで、本研究では、ポライトネス指導のために基礎となる研究を開始することとした。

研究代表者はそれまでも個々の表現とその語用論的機能を英語教育に直接取り組むことを目標として研究を行い、教材の開発も行ってきたが、商業出版という制約とともに行われた研究活動は、必然的にその制限も受けることとなった。そういった制限を超えて研究を進める必要性も本研究の背後にはあったと言い添えておく。

### 2. 研究の目的

狭義のポライトネスに限らず、語用論的なものを外国語教育に取り込もうとする試み自体は先行例もあったが、それらを教育に応用するためには、当時から現在にかけても盛んな語用論的「原理」の追求とはまた別のアプローチが必要であった。そこで我々は以下の2つを本研究の目的とした:

#### (1) 特に語彙に着目すること。

ポライトネスに限らず、特定の機能を持つ表現は、特定のコンテキストにおいて、特定の行為を実行するために繰り返し使用されたことで、そういった機能と結びついたと考えられる。逆の見方をすれば、特定の表現とその機能、使用コンテキストを特定することも十分に可能であるという仮定に基づいている。

(2) 英語教育において重要なポライトネスについて、理論面及び教育面の両面で英語教育研究に貢献すること。

1. で述べたように、本研究の背景には、いわゆる教材作成ではなく、純粋学問的な研究を遂行する必要性が感じられたということもあり、理論面での貢献も意識して研究を実施した。また、ポライトネスの対象となる範囲は広いと、パラ言語である英語プロソディの語用論的機能、教育の現場での指導、円滑な人間関係を構築しポライトネスの実現にも大きく寄与するユーモアについての研究などに様々な分野を専門とする研究分担者とともに、研究代表者は、各々が持つ専門的知見を基に研究計画を実行した。

### 3. 研究の方法

コミュニケーションの場は常に一様で

はない。「学習者が特定の状況下で何かを成し遂げたい時、どういった点に配慮し、どういった表現をどう用いるべきか」について、客観的データに基づいた応用のきく指針を示す必要があった。本研究は、研究代表者が2005年に実施した大規模日英対照語用論調査を基にしているが、そこでの問題点を克服する必要もあった。そのため、アンケート調査により得られた量的データの問題点を補完するため、調査後にインフォーマントに対し、メール等によるフォロー・アップも行った。アンケート自体にも、インフォーマントの判断がどのような根拠に基づいているのかを示すことが可能なように工夫を施した。

### 4. 研究成果

本研究は、当初、我が国の英語教育におけるポライトネスの扱い全般の改善を目指してスタートした。しかしながら、検定教科書等の教材におけるポライトネスの記述などを精査する過程で、より対象を絞った上で、より具体的な目標を目指す方が実際に教育の現場で教育に携わる方々に示唆に富む成果を提供することができるだろうと判断するに至った。したがって、ポライトネスという研究上の軸は計画の初めから首尾一貫して同じであるが、特定の重要な機能について、可能な限り客観的に記述する方向へと転換することとなった。

我々の基本的な立場は以下の通りである。コミュニケーションにおいてポライトネスは、相手に向かって笑顔を見せるといった場合を除けば、それ自体が単体で実現されることは少ない。人間がコミュニケーションを行う時、そこにはたいてい特定の目的があり、それを達成するための行為が続く。ポライトネスを、独立した機能とするのではなく、そういった行為を行う際に同時に実行される付随機能として扱うというのが我々の立場である。

たとえば、他者に助けを求める時、人は、よほど親しい友人や切迫した状況などを除き、通常は“Help me.”と直接的な依頼は行わない。相手の都合が悪かった場合、直接的な依頼を行ってしまえば相手も断りにくくなってしまふ。そのため、“Do you have a minute?”といった依頼前の確認表現をあらかじめ用いて、相手の都合を事前に確認したりもする。

上記の表現は、文字通りには決して依頼とはならない。時間があるかどうかを聞いているだけだからである。ただし、英語母語話者同士の会話において、上記の問いに、単に“Yes”か“No”と答えることはあまりなく、通常は助けの申し出や断るための理由などが続くことになるであろう。この「確認」という行為には、仮に相手が断らざるを得ない場合に相手を気まずくさせないとい配慮があり、それがこの行為に付随するポライトネス的機能である。2.において述べたよう

に、依頼の前にそういった表現が何度も使われることによって、そういった表現と依頼の事前確認というポライトネス上の機能が結びつき、聞き手もそのことを認知するようになるのである。こういった我々の前提は、本調査の進展に応じて確信へと変わった。また、語彙的アプローチによってポライトネスの相当な部分が記述できることも明らかになった。

英語の定型表現は数が多く、それらをすべて記述し尽くすことは不可能である。そこで我々は人間が日常に行う行為の分類を行った。言語の機能の分類は先行例も多いが、学習者が直感的に理解できるものは少なく、我々是对人のコミュニケーションの最小単位である話し手と聞き手、さらにお互いの利益と損失という最小限の要因のみで区別できる分類を行い、それに基づいたリストを作成した。また、口語コーパスからのデータも参考にしながら、バランスよく記述の対象の候補となる語句を選定した。最終的に500語を超える数になり、そのため、遅れも生じたが、当初の予定数に関しては、インフォマントへのアンケート調査の終了することができた。

昨年度の時点で、調査データは分析も終了し、それまでの成果の一部は本報告書に記載の学会発表、論文、著書として公刊されている。さらに、学習辞書といった教材や、コミュニケーション重視の英語教育を行うテキストの形でまとめたものもある。今後、さらに見直しを加えた上で、研究代表者と研究分担者を中心とした共著のハンドブック、さらに、研究代表者による単著の研究書として平成29年度末に刊行の予定となっている。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

磯野 達也、言葉、文法の不思議、『成城教育』、査読なし、第 172 号、2016、pp.72-79

川村 晶彦、子供の詩を読む 文学と言語コミュニケーションに関する覚書、『社会イノベーション研究』、査読あり、第 11 巻、2016、pp.123-34

大和 知史、アダチ 徹子、中学校検定教科書の語用論的観点からの分析：平成 28 年度改訂版「Sunshine English Course」を例に、『神戸大学国際センター論集』、査読なし、第 12 号、2015、pp.79-89

アダチ 徹子、田村 京子、小中一貫・連携教育と英語教育 宮崎大学教育文化学部附属小学校・中学校の考え方、『九州英語教育学会紀要』、査読あり、第 43 号、2015、pp.55-60

〔学会発表〕(計 3 件)

Scott Gardner、“Don’t Even Ask” : Humor and Pragmatics in Japanese Junior High School English Textbooks、21st Australasian Humour Studies Network Conference、5 February 2015 State Library of South Australia、Adelaide、Australia

アダチ 徹子、田村 京子、小中一貫・連携教育と英語教育 宮崎大学教育文化学部附属小学校・中学校の考え方、第 43 回九州英語教育学会、2014 年 12 月 6 日、大分大学、大分県大分市

川村 晶彦、EFL 辞書と語用論：ポライトネスを中心に、JACET 英語辞書研究会・関西辞書学研究会(KELC)合同シンポジウム、2014 年 5 月 31 日、愛知大学名古屋キャンパス、愛知県名古屋市

〔図書〕(計 5 件)

磯野 達也 他、開拓社、『不思議に満ちたことばの世界 下』、2017、264

川村 晶彦 他、大修館書店、『英語辞書をつくる』、2016、244

川村 晶彦 他、三省堂書店、『ピーコン英和辞典』、第 3 版、2016、1,696、(校閲協力)

アダチ 徹子 他、『小中一貫・連携教育の実践的研究 これからの義務教育の創造を求めて』、東洋館出版社、2014、243

アダチ 徹子 他、『教師教育講座第 16 巻』、2014、333

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

川村 晶彦 (KAWAMURA, Akihiko)  
成城大学・社会イノベーション学部・教授  
研究者番号：60407616

##### (2) 研究分担者

アダチ 徹子 (ADACHI, Tetsuko)  
宮崎大学・大学院教育学研究科・准教授  
研究者番号：30199195

ガードナー スコット (GARDNER, Scott)  
岡山大学・教育学研究科・准教授  
研究者番号：30304330

大和 知史 (YAMATO, Kazuhito)  
神戸大学・大学教育推進機構・准教授  
研究者番号：80370005

磯野 達也 (ISONO, Tatsuya)

成城大学・社会イノベーション学部・教授  
研究者番号：10368673

(3)連携研究者

石井 康毅 (ISHII, Yasutake)  
成城大学・社会イノベーション学部・准教授  
研究者番号：70530103

(4)研究協力者

カウイー ニール (COWIE, Neil)  
岡山大学・言語教育センター・教授

クック メロディー (COOK, Melodie)  
新潟県立大学・国際地域学部・教授

スペンサー＝オーティー ヘレン  
(SPENCER-OATEY, Helen)  
英国ウォリック大学・応用言語学研究所・教授

ハリソン ティリー (HARRISON, Tilly)  
英国ウォリック大学・応用言語学研究所・  
プリンシパル・ティーチング・フェロー

フジシマ ナオミ (FUJISHIMA, Naomi)  
岡山大学・言語教育センター・教授

リチェズ デニス (RICHERS, Dennis)  
成城大学・社会イノベーション学部・教授